文部省檢定濟

明治書院編輯部編

改修

新編日本文典

下

あ段	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
い段	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ
う段	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
え段	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
お段	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を

4a
815
大14

42033
教科書文庫
4
815
41-1925
20000
65663

資料室

大正十四年十一月十七日
文部省檢定濟
中學校國語科用

教科書文庫
4
815
41-1925
2000065663

廣末藏書

改修

新編日本文典

下

明治書院編輯部
編纂

広島大学
教
65663
図書

廣末藏書

広島大学図書
2000065663

株式會社
東京・明治書院・神田

4a
815
大14

大正十四年十一月十七日
文部省檢定濟
中學校國語科用

改修

新編日本文典

下

明治書院編輯部
編纂

広島大学
敎
65663
図書
廣末藏書
広島大学図書
2000065663

株式會社
東京・明治書院・神田

廣末藏書

改修 新編日本文典 卷下目次

品詞篇（下）

第一章　動詞の性……一
第二章　動詞の相……五
第三章　時の表し方……一三
第四章　推量の表し方……二三
第五章　指定・否定の表し方……二九
第六章　希望、及び比況の表し方……三三
第七章　命令・禁止の表し方……三七
第八章　疑問の表し方……四〇
第九章　動詞・形容詞と、助動詞・助詞との連續……四三

第十章　惑ひ易き助動詞・助詞……五三
第十一章　誤り易き語法……六四

文章篇

第一章　主語　述語……七八
第二章　客語　補語……八三
第三章　修飾語……八七
第四章　主部・客部・補部・述部・文主部……九三
第五章　主語・客語・補語・述語・修飾語の倒置、及びその省略……九六
第六章　句……一〇一
第七章　文章の構造上の種類……一〇五
第八章　文章の性質上の種類……一一四

（終）

他動詞は「何々を」といふ語を受く。

改修 新編日本文典 巻下

品詞篇（下）

第一章　動詞の性

〇一　「鳥鳴く」「水流る」の「鳴く」「流る」などの如きは、その動作が動作主のみに止り他に關係を及さぬものなれば、これ等は卽ち自動性の動詞なり。

二　「人花を折る」「鳥餌を求む」の「折る」「求む」などの如

「山を上る」「橋を渡る」などは、性の上よりは自動なれど、文中に表るゝ形の上よりは他動なり。

きは、その動作が動作主より他に關係を及すものなれば、これ等は卽ち他動性の動詞なり。

右の如く、動詞には自動性のものと、他動性のものとあり。その自動性の動詞を**自動詞**といひ、他動性の動詞を**他動詞**といふ。

○同一活用の動詞にても、場合によりて、自動詞ともなり他動詞ともなるものあり。

増す
- 水が増す（四段活用）……自動詞
- 水を増す（四段活用）……他動詞

開く
- 扉が開く（四段活用）……自動詞
- 扉を開く（四段活用）……他動詞

○又、同一の動詞にても、自動と他動との場合によりて、その活用を異にするものあり。

吹く
- 風が吹く（四段活用）……自動詞
- 笛を吹く（四段活用）……他動詞

沈む
- 舟が水に沈む（四段活用）……自動詞
- 石を水に沈む（下二段活用）……他動詞

滿つ
- 水が瓶に滿つ（四段活用）……自動詞
- 水を瓶に滿つ（下二段活用）……他動詞

立つ
- 大工が門に立つ（四段活用）……自動詞
- 大工が門を立つ（下二段活用）……他動詞

○又、語原相同じき動詞にても、自動と他動との場合により

て、その語形活用を異にするものあり。

- 染む
  - 絲が染る（四段活用）……自動詞
  - 絲を染む（下二段活用）……他動詞
- 連る
  - 車が連る（四段活用）……自動詞
  - 車を連ぬ（下二段活用）……他動詞
- 覺む
  - 目が覺む（下二段活用）……自動詞
  - 目を覺す（四段活用）……他動詞

◎次に擧げたる動詞の自他を問ふ。

動く　置く　凍る　閉づ　瘦す　蹴る　與ふ

飢う　忘る　射る　泣く　載す　食ふ　來る

死ぬ　眠る

◎次に擧げたる動詞を自動他動の兩樣に活用せしめて見よ。

碎く　並ぶ　建つ　重ぬ　亂る　見る　終る

留む　固む　改む　移る　治む　宿る　歸る

埋る　照す　過ぐ　盡す　癒ゆ　消す　流る

顯る　暮る　枯す　添ふ

第二章　動詞の相

○一　「花が散る」「水が流る」「犬猫を追ふ」「風家を倒す」の「散る」「流る」などは自動性を表し、「追ふ」「倒す」などは他動性を表すものにて、動詞の本來の姿なれば之

る・らる は、口語にては れる・られる となる。

を**本來の相**といふ。

右の如く、本來の相は動詞そのまゝにて表すものなり。

○二　「猫が犬に追はる」「家は風に倒さる」「人が犬に吠えらる」「妹は母に愛せらる」の「追はる」「倒さる」「吠えらる」「愛せらる」などは、動作を他より受くる意を表す姿なれば、之を**受身の相**といふ。

右の如く、受身の相は動詞の未然形に助動詞「る」「らる」を添へて表すものなり。但し、「る」は四段・奈變・良變の三活用にのみ連り、「らる」はその他の諸活用に連る。

●「らる」が佐變の活用の動詞に添はるには、その未然形につきて「罪せらる」「周旋せらる」「案内せらる」などいふべきを、今文にては之を約めて、「罪さる」「周旋さる」「案内さる」などとも用ひらる。

○三　「假名だけは讀まる」「一日に十里を歩まる」「いかやうにも考へらる」「何人にも容易に解せらる」の「讀まる」「歩まる」「考へらる」「解せらる」などは、己の力にて爲し能ふ意を表す姿なれば、之を**可能の相**といふ。

右の如く、可能の相は受身の相と同じく、動詞の未然形に助動詞「る」「らる」を添へて表すものなり。而して、「る」は四段・奈變・良變の三活用にのみ連り、「らる」はその他の諸活用に連ること、受身の相に同じ。

○可能の相は、又轉じて動作が自然に催されて止められぬ

す・さす・しむは、口語にてはせる・させる・しめるとなる。

意を表すことあり。

故郷の事のみ思はる

ただ夢とのみ考へらる

○**四**　「弟に畫を書かす」「使を學校に走らす」「大工に家を建てさす」「弟に雀を捕へさす」「妹に花を折らしむ」「下婢に手傳はしむ」の「書かす」「走らす」「建てさす」「捕へさす」「折らしむ」「手傳はしむ」などは、他を使役する意を表す姿なれば、之を**使役の相**といふ。

右の如く、使役の相は動詞の未然形に助動詞「す」「さす」「しむ」を添へて表すものなり。但し、「す」は四段・奈變・良變の三活用に連り、「さす」はその他の諸活用に連り、「しむ」はすべての活用に連る。

せらる・させらる・しめらるは、口語にてはせられる・させられる・しめられるとなる。

●「さす」が佐變の活用の動詞に添はるには、その未然形につきて、「周旋せさす」「案内せさす」などいふべきを、今文にては、「せ」を略して「周旋さす」「案内さす」などとも用ひらる。

●又、「しむ」は、すべての動詞の未然形に添はるものなれば、下二段活用の動詞「得(ウ)」に「しむ」を添ふれば、「得(エ)しむ」といふべきが當然なるを、今文にては中に「せ」を加へて、「得(エ)せしむ」とも用ひらる。

○**五**　「弟は兄に畫を書かせらる」「大工が主人に家を建てさせらる」「妹が兄に花を折らしめらる」の「書かせら

る」「建てさせらる」「折らしめらる」などは、他に使役せらるゝ意を表す姿なれば、之を**被役の相**といふ。

右の如く、被役の相は使役の相の動詞の未然形に「らる」を添へて表すものなり。

○**六**「父は非常に茶を好まる」「主人は毎年上京せらる」「主上都を出で立たす」「姫君は朝夕琴を彈ぜさす」「殿下も觀艦式に臨ませらる」「演習中傷を受けさせらる」「皇太子御位に卽かしめらる」「親ら朝政を執らせ給ふ」「國中の名産を集めさせ給ふ」「おほやけも行幸せしめ給ふ」の「好まる」「上京せらる」「出で立たす」「彈ぜさす」「臨ませらる」「受けさせらる」「卽かしめらる」

給ふ・奉る・候ふなどの動詞は、本來の意味が失せて崇敬の意を表す助動詞の用をなすこと多し。
歩を進め給ふ
新年を賀し奉る
お祝詞申し上げ候ふ

「執らせ給ふ」「集めさせ給ふ」「行幸せしめ給ふ」などは、他を敬ふ意を表す姿なれば、之を**崇敬の相**といふ。

右の如く、崇敬の相は、可能・使役・被役の相と同形、若しくは使役の相に「給ふ」を添へて表すものなり。

○以上述べたるが如く、動詞が受身・可能・使役・被役・崇敬等の諸相を表すには、いづれも助動詞の助をかるものなり。かく動詞に助動詞の添はりて連語をなせるものは、一の熟語の動詞と見なすをよしとす。これより以下單に動詞といへるは、動詞に助動詞の添はれる連語をも含むと知るべし。

◎左の文章中につき、受身可能使役被役崇敬の相の動詞を指摘せよ。

一 捨てられし孤兒の心の中も思ひやられて、あはれに感せらる。

二 父母の死なれし後は、祖母の手によりて養育せられたり。

三 秀吉は信長に擢でられて、大任を負はしめらる。

四 甚だ領會せられぬことをいはるゝ人かな。

五 家は暴風に吹き倒され、愛兒は激浪におし流されて、狂せむばかりなり。

六 陛下には、君が代の奏樂の裡に正殿に臨御あらせられ、やがて玉座につかせ給ふ。

七 彼は篤志家に救はれ、學資を給せられて勉學する事を得、遂に學界の泰斗と仰がるゝに至れり。

八 子供に家事を手傳はすれば、奴婢になさしむる事も少しとて、悉く奴婢を解雇して、母は自ら家業を營まれたり。

九 去年の今日、北山にて花の宴せさせ給ひしこと思し出でられて、その日の事戀しうおぼさる。

十 無き事によりて罪せられ給ふを歎かれ給ひて、やがて出家せしめ給ひけり。

第三章 時の表し方

○前章に學びたる本來・受身・可能・使役・被役・崇敬の諸相の動詞は、すべてそのまゝにて現在の時を表すものなり。

櫻の花咲く(本來)

猫犬に追はる(受身)

き・けり は口語にてはたの一語となる。

古文にはけりが過去の意失せて詠歎の意を表せるものあり。
怪しきものは心なりけり
み空の星と誤たれけり。

一萬まで數へらる(可能)

弟に書を讀ましむ(使役)

父に書を讀ましめらる(被役)

殿下は畫を好ませらる(崇敬)

○右の如き現在の動詞の連用形に、助動詞「き」「けり」を添ふれば、その動作の全く過去となれる意を表すものなり。

花風に散りき

犬人に追はれけり

一日に八里は歩まれき

妹に琴を習はせけり

强ひて畫を學ばせられき

夜明けぬ前に旅立たれけり

○右の過去を表す「き」は、加變・佐變の兩活用の動詞に續く場合に限り、左表の如き例外あり。

○卽ち、「き」の活用「し」「しか」は、加變にては未然形にも連用形にも續けど、決して「き」は用ひられず。又、佐變にては、「き」は連用形に、「し」「しか」はその未然形に續くものなり。

	未然形	連用形
加變	來(コ)し しか	來(キ)し しか
佐變	爲(セ)し しか	爲(シ)き

●右の如く、「き」は加變・佐變の兩活用の動詞に限り、そのつゞけ方に例外あれど、その他の活用の動詞には、すべてその連用形に添はるものなり。されば、「き」の活用の

つ・ぬ・たりも口語にてはたの一語となる。

「し」「しか」も、四段活用の動詞につゞく時は「殺しし」「過ししか」などいひ、下二段活用の動詞につゞく時は「載せし」「仰せしか」などいふべきが當然なれど、今文にては、四段活用の動詞につゞく場合に、その已然形に「し」「しか」を添へて、「殺せし」「過せしか」などとも用ひらる。

●又「き」の終止形は「き」なれば、「大なりき」「衰へざりき」などいふべきなれど、今文にては、その連體形「し」にていひ切り、「大なりし」「衰へざりし」などとも用ひらる。

○又、現在の動詞の連用形に、助動詞「つ」「ぬ」「たり」を添ふれば、その動作が現在には既に完了せる意を表すものなり。

鳥啼きつ

りも亦口語にてはたとなる。

首を打たれつ

夢とのみ思はれぬ

急ぎて歸らしめぬ

一一覺えさせられたり

知事も臨場せられたり

○又、四段・佐變の兩活用の動詞に限りて、特にその命令形に助動詞「り」を添へて、完了せる動作を表さしむることあり。

花美しく咲けり

獨り門前に立てり

舊友一堂に會せり

戰ひ……へ
てき
にき
たりき
へりき

手を打つて賞贊せり

●右の如く、「り」は四段・佐變の兩活用の動詞の外には續かざる助動詞なれど、今文にて、「異なり」といふ形容動詞に限り、その命令形に「り」を添へて、「異なれり」と用ひらる。又、この形容動詞は、その連用形より「て」「たり」につゞけて、「異なりて」「異なりたり」など用ひらるゝも、他の形容動詞と異なる所なり。

○過去を表す「き」「けり」は更に、「つ」「ぬ」「たり」「り」の連用形に添へて用ひらるゝことあり。但し、今文には多く用ひられず。

斃るるまで戰ひてき

優り……れ
てけり
にけり
たりけり
れりけり

「たりき」「たりけり」などは、今文にも常に用ひらる。

一門悉く滅されてけり

見るかげもなく荒れ果てにき

待ちし櫻もうつろひにけり

長く待たせられたりき

臨幸せさせられたりけり

非常の恩顧を蒙れりき

世の人には優れりけり

むは口語にてはう又はようとなる。

○又、現在の動詞の未然形に助動詞「む」を添ふれば、その動作が未來に起らむとする意を表すものなり。

明日雨降らむ

多くの人人を喜ばせむ

知り―てむ
知り―なむ
知り―たらむ
知れ……らむ

「たらむ」は今文にも常に用ひらる。

○「む」は未來を表す助動詞なれば、轉じて推量の意ともなる。

彼の謀は必ず破れむ

訪ふ人も無からむ

○未來を表す「む」は、更に、「つ」「ぬ」「たり」「り」の未然形に添へて用ひらるゝことあり。但し、今文には多く用ひられず。

日の暮るるまで書を讀みてむ

晝頃には波も凪ぎなむ

足の向きたらむ方へ往かむ

心知れらむ人に見せばや

◎左の文章中の時の助動詞につきて說明せよ。

一　恩賞に預りしこと、已に數度に及べり。

二　民富み國榮えたりしかば、天下平かに治りき。

三　遊學の志ありつれど、今は水泡となれりとて慨かれけり。

四　年の內に春は來にけり、一とせを去年とやいはむ、今年とやいはむ。

五　一村の中に、昔より住める人は一人もなきやうになりぬ。

六　實朝も失せてければ、政柄は遂に北條氏に移りたりき。

七　植ゑし時花見むとしも思はぬに咲き散る見れば齡老いにけり。

八　四十餘の春秋を送れる間に、世の不思議を見ることやゝ度々になりぬ。

九　嗚呼うたてしき事かな我が最後の樣を見むために遙々と尋ね下りたる幼き者を、一目も見ずして果てぬることよ。

十　東山に用ありて既に行き着きたりとも、西山に行きてその益まされる事を思へば、門より歸りて急ぎ西山へぞ行きぬる。

らむは、口語にては、であらう（だらう）となる。

第四章　推量の表し方

○動詞の終止形に助動詞「らむ」を添ふれば、現在の動作を推量する意を表すものなり。

み吉野の山も霞みて今朝は見ゆらむ

靜心なく花の散るらむ

○右の「らむ」は、また助動詞「つ」「ぬ」の終止形、及び「たり」「り」の連體形に添へて用ひらるゝことあり。但し、今文には多く用ひられず。

咲き……つらむ／ぬらむ／たるらむ／け―るらむ

けむは、口語にてはたらうとなる。

「谷間の氷も解けつらむ

岸の姫松幾代經ぬらむ

野べの草木も萌え出たるらむ

尾の上の櫻咲けるらむ

○又、動詞の連用形に助動詞「けむ」を添ふれば、過去の動作を推量する意を表すものなり。

洋學はいつの頃より興りけむ

可憐なる孤兒は誰の手に養はれけむ

○右の「けむ」も、また助動詞「つ」「ぬ」「たり」「り」の連用形に添へて用ひらるゝことあり。但し、今文には多く用ひられず。

古より滅びてけむ

詠み——て けむ
　　——に けむ
　　——たり けむ
め……り けむ

「たりけむ」は今文にも常に用ひらる。

今文にてはらしを「らしく・らし・らしき・らしけれ」と活用せしむれど、古くはらしに活用なし。

いつの頃より定められにけむ

故大久保卿は何年に薨ぜられたりけむ

この歌は誰が詠めりけむ

○又、前章に説ける未來の助動詞「む」は、未來を推量する意を表すものなり。

五穀實らざれば饑に泣く者多からむ

君の健康はやがて恢復せむ

○この外、今文には用ひられねど、古くは「らし」「めり」（めり・める・めれ）「まし」（ませ・まし・ましか）等の助動詞も、また推量の意を表すに用ひられたり。但し、「らし」「めり」は動詞の終止形に添はり、「まし」は未然形に添はる。

べしは、口語にてはであらうとなる。

三吉野の山の白雪積るらし故里寒くなり勝るなり

立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ

世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心は長閑からまし

○又、動詞の終止形に助動詞「べし」を添ふれば、その動作を推量して指定する意を表すものなり。

明日は雨霽るべし

汝に褒美を取らすべし

父も今夜歸宅せらるべし

○右の「べし」は、良變の動詞、及び形容動詞につゞく場合に限り、その連體形に添はる。

今晩は自宅に在るべし

斷念するが宜しかるべし

○「べし」は推量して指定する助動詞なれば、轉じて可能、命令等の意ともなる。

腰間の秋水鐵をも斷ずべし（可能）

皆皆怠らず勉むべし（命令）

○「べし」は、又、動詞の「あり」と連り約りて、「べかり」となること多し。

車にて行くべかりき

猥に出入すべからず

○「べし」は、又、助動詞「つ」「ぬ」の終止形、及び「たり」の連體形

枯れ　つべし／ぬべし／たるべし

まじは、口語にてはまいとなる。

に添へて用ひらるゝことあり。但し、今文には多く用ひられず。

草木も枯れつべし

水かさも增りぬべし

今は彼の老人も世を去りたるべし

○又、動詞の終止形に、助動詞「まじ」を添ふれば、その動作を推量して否定する意を表すものなり。

夜は未だ明くまじ

馬車にては通らるまじ

何人にも見さすまじ

○右の「まじ」も、良變の動詞、及び形容動詞につゞく場合に

限り、その連體形に添はる。

不都合の事もあるまじ

思ふほどには苦しかるまじ

◎左の文章中の推量の助動詞につきて説明せよ。

一 なに思ひつらむ、から〳〵と大笑せり。

二 いつの頃なりけむ、今はほと〳〵忘れ果てけり。

三 我等この里に在りと知らば、我等をも殺さむとや思ふらむ。

四 いかなる目にあふとも、逃げぬべき心地せざりけむ。

五 今日明日斬らるべき人には、中々よみ路の障ともなりぬべし。

六 物羨みはすまじきものとは、誰がいひ初めし訓なるらむ。

七 山里に散りなましかば、櫻花匂ふさかりも知られざらまし。

八 一日の内、一時の中にも、數多の事の來らむ中に、少しも益の勝らむ事を營みて、その外をば捨つべきなり。

九 知らぬ道の羨しく覺えば、あな羨しなどか習はざりけむといひてありなむ。

十 立田川色紅になりにけり、山の紅葉も今は散るらし。

第五章 指定・否定の表し方

○動詞の連體形に、助動詞「なり」を添ふれば、その動作を指定する意を表すものなり。

我はしかあらむと信ずるなり

愚なるが故に人に侮らるるなり

古文にはなりが指定の意失せて詠歎の意を表せるものあり。
秋の野に人まつ蟲の聲すなり
皆人は花の衣になりぬなり

なり・たり は、口語にてはである（だ）となる。

○右の「なり」は、又、名詞、及び形容詞の連體形にも添はりて、指定の意を表すものなり。

學校は子女を教育する所なり

我が強きにあらず敵の弱きなり

○又、助動詞「たり」を名詞に添へて、指定の意を表すことあり。

人たるものの盡すべき道たり

父は父たらずとも子は子たれ

●右の「なり」は、もと「にあり」の約りたるもの、「たり」は「とあり」の約りたるものにて、その語の成立、他の助動詞と同じからず。されば、この二の助動詞に限りて、名詞・形容詞などにも添はるものなり。

ず・じ は、口語にては ない・まい となる。

●今文にては、「といふ」といふ語の代りに「なる」を用ひて、「顔回なるものあり」「柔術なるものは」などいはるることあり。

○又、動詞の未然形に、助動詞「ず」、又は「じ」を添ふれば、その動作を否定する意を表すものなり。但し、「ず」は斷言するに用ひ、「じ」は推量するに用ひらる。

何物も見えず

容易に解せられず

あだには思はじ

輕輕しくはいはれじ

○「ず」は、又、動詞の「あり」と連り約りて、「ざり」となること多し。

勝つこと能はざりき

よく考へざるなり

◎左の文章中の指定・否定の助動詞につきて説明せよ。

一　協はじとや思ひけむ、太刀を捨てて逃げ失せたり。

二　日本は東洋の一小帝國なれど、世界の強國たるに恥ぢず。

三　見もせず聞きもせぬ事は、人に談ること能はじ。

四　弱卒なりとて侮られじ。

五　計られぬものは人の身の上なるべし。

六　正直なる彼は、己の過失を蔽ふに忍びざりしなり。

たしは口語にてはたいとなる。

七　精巧なる器械も、運用拙なれば、粗雑なる器械と選ぶことなきなり。

八　校規に従はず學業を勉めざる者は、學生たる本分を忘れたるものなり。

第六章　希望、及び比況の表し方

○動詞の連用形に、助動詞「たし」を添ふれば、その動作を希望する意を表すものなり。

よくよく思考せられたし

一日も早く行きたし

○この外、今文には餘り用ひられねど、動詞の未然形に「まほし」（まほしく・まほし・まほしき・まほしけれ）を添へて希望の意を表すことあり。

ごとしは口語にてはやうである（やうだ）となる。

花見に行かまほし

男にてあらまほし

○又、古くは「ばや」「なむ」等の助詞を動詞の未然形に添へて、希望の意を表すに用ひたり。

心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を

焼かずとも草は萌えなむ春日野のただ春の日に任せたらなむ

○又、動詞の連體形に、助動詞「ごとし」を添ふれば、その動作を他に對比する意を表すものなり。

裁決水の流るるごとし

奔流矢を射るごとし

○右の「ごとし」は、助詞「が」を間に挟みて、動詞・形容詞の連體形に添はること多し。

朽木の倒るるがごとし

光陰は矢を射るがごとし

軍に将なきがごとし

花の美しきがごとし

○又、助詞「の」を間に挟みて、名詞に添はることも少からず。

月光鏡のごとし

波濤の響雷のごとし

●「ごとし」は形容詞に似たる活用をなす助動詞なれば、

「ごとけれ」とも活用すべきやうなれど、さる活用なく、必ず、「ごとかれ」「ごとくなれ」などいふ。

人の往めるがごとかれ（ごとけれ）ど影だに見えず

よく似かよへるがごとくなれ（ごとけれ）ども實際は然らず

◎左の文章中の希望・比況の助動詞につきて說明せよ。

一　その聲泣くがごとく訴ふるがごとし。

二　京都にも奈良にも遊びたければ、暇なき身はたゞ心に思ふのみ。

三　徒に十年の歲月を夢のごとく過しつるこそ口惜しけれ。

四　見たし聞きたしと思ふことのみなり。

五　繪に書けるごとき絕景、眞に天工の妙を極めたり。

六　言の葉の誠の道を月花のもてあそびとは思はざらなむ。

七　東路の人に問はばや白川の關にもかくや花は匂ふと。

第七章　命令禁止の表し方

○動詞の命令形に、助詞「よ」を添ふれば、その動作をせよと命令する意を表すものなり。但し、四段・奈良變・良變の三活用の動詞に限りては、「よ」を添ふるの必要なし。

怠らず勉强せよ

よく考へて見られよ

急ぎて行け

死ぬべき時に死ね

汝はここに居れ

○又、動詞の終止形に、助詞「な」を添ふれば、その動作をすなと禁止する意を表すものなり。但し、良變の動詞に限りては、その連體形に添はる。

決して人を侮るな

あだ矢を射さすな

危き所に居るな

○又、推量の助動詞「べし」が轉用せられて、命令の意を表すことあり。但し、禁止の意を表すには「べからず」といふ。

汝等は毎朝六時に起くべし

通行人は路の左側を往來すべし

何人も危き所に近寄るべからず

汝は悪人の眞似をすべからず

◎左の文章中の、命令禁止の助詞につきて説明せよ。

一　ゆめ〳〵學業を怠るな。

二　思ふがまゝに斷行せよ。

三　打たば打て、斬らば斬れ、殺さば殺せ。

四　油斷して人に追ひ越さるな。

五　早く來よと手招きして敎へけり。

六　何人もこの土手に登るべからず。

七　明朝午前九時當省に出頭すべし。

第八章　疑問の表し方

○動詞の終止形に、助詞「や」を添ふるか、又はその連體形に「か」を添ふれば、その動作を疑ふ意を表すものなり。

汝は兄弟ありや

夜はしづかに眠らるや

この問題に答へ得るか

何時頃歸らるるか

○「や」「か」は、又、形容詞にも添はりて疑問の意を表すものなり。但し、「や」はその終止形に、「か」はその連體形に添はること動詞に同じ。

路は遠しや

夜も暑しや

樂しきかはた悲しきか

○右の如く、「や」「か」は、いづれも疑問の意を表せども、上に疑の語ある時は、必ず下に「か」を用ふべきものとす。

甲乙の中いづれを選ぶか

朝鮮にはいかなる動物多きか

○上に疑の語ある時は、その疑問の意明かなるを以て、下の「か」を省くこと多し。

甲と乙といづれが善き(か)

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月

宿るらむ(か)

●「や」「か」の用法は以上の如くなれども、今文にては、上に疑の語のあるとなしとに拘らず、いづれも動詞・形容詞の連體形に添へて、「有るや」「遠きや」「眠らるるか」「悲しきか」など用ひらる。

◎左の文章中の「や」「か」を、古き語法によりて正して見よ。

一 此處より彼處まで何町あるや。
二 その名畫は實際に見るを得るや。
三 甲乙何れを美しと定むべきや。
四 父母をおもはぬ人あるや否や。
五 この小犬は誰が家の愛犬なりや。

第九章 動詞・形容詞と助動詞・助詞との連續

○以上述べたる所によりて、助動詞・助詞が動詞・形容詞などに連續するさまを表示すれば、左の如し。

動詞に連

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	つ	べし	なり		り
らる	ぬ	まじ	ごとし		
す	たり	らむ			
さす	き	らし			
しむ	けり	めり			

るもの	形容詞に連るもの
む まし ず じ まほし	
けむ たし	
な や	や
か (や)	なり ごとし (や) か
よ	

●本表中、太字の「な」「よ」「や」「か」の四は助詞にして、他は助動詞なり。但し括弧内のものは、多く今文にのみ用ひらるゝと知るべし。

動詞・助動詞の連續表

	四段	良變	奈變	上二段	下二段	上一段	下一段	佐變	加變
未然形	讀ま	有ら	死な	起き	受け	(着)	(蹴)	(爲)セ	(來)コ
	る す			らる さす					
	しむ む まし ず じ まほし								
連用形	讀み	有り	死に	起き	受け	(着)	(蹴)	(爲)シ	
	き								
	つ ぬ たり けり けむ たし								
終止形	讀む		死ぬ	起く	受く	着る	蹴る	(爲)ス	(來)ク
	べし まじ らむ らし めり								
連體形	讀む	有る	死ぬる	起くる	受くる	着る	蹴る	爲る	來る
	べし まじ らむ らし めり								
	なり ごとし								
命令形	讀め							(爲)セ	
	り								

〔特例〕
きハ佐變ノ連用形ニツキソノ活用ノ
し・しかハ未然形ニツク
又し・しかハ加變ノ未然・連用ノ兩形
ニツケドモきハ決シテ加變ニツカズ

●右の表の中、「る」「す」は、四段・奈變・良變の活用の動詞に限りて添はり、「らる」「さす」は、その他の上一段・下一段・上二段・下二段・加變・佐變の活用の動詞に限りて添はるものなり。

○「き」は、加變・佐變の活用の動詞に添はる場合に限り、特別の用法あり。一五頁を參照すべし。

○「べし」「まじ」「らむ」「らし」「めり」は、良變の活用の動詞に限りては、その連體形に添はるものなり。

○「り」は四段・佐變の活用の動詞に限りて添はるものなり。

○「よ」は、上一段・下一段・上二段・下二段・加變・佐變の活用の動詞に限りて添はるものなり。

○右の外、接續の用をなす助詞が、上の動詞・形容詞などに續くさまを表示すれば左の如し。

	動詞に續くもの	形容詞に續くもの
未然形	ば、で	ば
連用形	て、つつ	とも
終止形	と、とも	
連體形	(と)、(とも)、が、を、に	が、を、に
已然形	ば、ど、ども	ば、ど、ども
命令形		

● 本表中、括弧内のものは、多く今文にのみ用ひらるゝものと知るべし。

○「ば」は動詞・形容詞の未然形に添はりて假定の條件を表し、又、已然形に添はりて確定の條件を表すものなり。隨つてそれに相應する意を下にいひ表すべきものなり。

上の條件が確定の場合には、之に應ずる下の語は、確定にもいひ、假定にもいふ。

風吹かば花散らむ

風吹けば花散る　　風吹けば花散らむ

運よくば勝つべし

運よければ勝つ　　運よければ勝つべし

犬も吠えずば打たるまじ

犬も吠えねば打たれず　　犬も吠えねば打たるまじ

○「とも」は、動詞の終止形と形容詞の連用形とに添はりて假定の條件を表し、「ど」「ども」は動詞形容詞の已然形に添はりて確定の條件を表すものなり。

悔ゆとも及ぶまじ

悔ゆれど及ばず

苦しくとも忍ばむ

苦しけれども忍ぶ

●「とも」は動詞の終止形に添はりて、「死ぬとも」「殺さるとも」などいふべき定めなれど、今文にては、その連體形に添へて、「死ぬるとも滅罪せじ」「殺さるるとも白狀すまじ」など用ひらる。

●又「とも」と「ども」とは、今文にては、往々略して「も」とし、動詞の連體形に添へて用ふること多し。

終日働くも(働クトモ)厭はじ

數日を經たるも(經タレドモ)歸り來ず

草案は會議に附するも(附ストモ 附スレドモ)之を公表せず

右の「働くも」「經たるも」などの如く、誤解を生ぜざるものは、かく用ふるも妨なけれど、「附するも」の如く、兩樣に解せらるゝものは、必ずその用法を正しうすべし。

○「と」は元來名詞につきて、「都と定む」「甲と乙とあり」などいはるゝ助詞なれど、又、動詞・形容詞などにも添はることあり。その場合には、すべて上の語句の意味の切れたる所を受くるものなり。

敵兵來ると告ぐ

櫻が最も美しと思ふ

櫻ぞ最も美しきと思ふ

敵兵こそ來れと告ぐ

●「と」は動詞の終止形を受けて、「月出づと見えたり」「事務を執らしむといふ」などいふべきが古來の語法なれど、今文にては、その連體形を受けて、「月出づると見えたり」「事務を執らしむるといふ」などとも用ひらる。

●「と」は、又、「日本と支那との關係」「弟と妹とあり」「墨と雪との差あり」などの如く、體言を重ぬる時は、その各個に添ふべきが古來の語法なれど、今文にては、最終の「と」を省きて、「日本と支那(と)の關係」「弟と妹(と)あり」「墨と雪(と)の差あり」などとも用ひらる。されど、左例の如く兩樣の意味に解せられて誤り易きものは、必ずその用法を正しうすべし。

昨日は叔母と伯父(と)の家を訪ねき
この新聞は日曜日と大祭日(と)の翌日は休刊す

○「て」「で」「つつ」「が」「を」「に」等は、その用法に誤り易きこともなければ、たゞその用例を一括して、左に示すべし。

叔母の家にも立ち寄りて歸れり
書を讀み了へて寢に就きぬ
叔母の家には立ち寄らで歸れり
書を讀み了へで寢に就きぬ
書を讀みつつうとうとと眠りぬ
日毎に詣でつつ祈願を籠めたり
提灯は見ゆるが人影は見えず

品は善きが價高し
雨降れるを傘なしに出でぬ
物陰とてなきを何處に隱れけむ
日照るに雨降る
夜は未だ暗きに旅立つ人あり

第十章　惑ひ易き助動詞・助詞

○助動詞・助詞の中には、その語形の相似たるより互に惑ひ易きもの少からず。左にその主なるものを說かむ。

○一　一氣に勝を制せむとするなり
秋の野に人まつ蟲の聲すなり

右の「制せむとするなり」の「なり」は指定の助動詞の「なり」にして、「聲すなり」の「なり」は詠歎の意を表す古き助動詞なり。但し、指定の「なり」は動詞の連體形につき、詠歎の「なり」は動詞の終止形につくと知るべし。

○二　島國なる日本

駿河なる富士の山

偉大なる體軀

國家なるもの

右の「島國なる」の「なる」は指定の助動詞、「駿河なる」の「なる」は「にある」の約りたるもの、「偉大なる」の「なる」は形容動詞の語尾にして、「國家なる」の「なる」は「といふ」の意に

用ひらるゝ助動詞なり。

○三　伯父は某銀行の重役たり

兄は今春某大學を卒業したり

右の「重役たり」の「たり」は指定の助動詞の「たり」にして、「卒業したり」の「たり」は時の助動詞の「たり」なり。但し、指定の助動詞の「たり」は名詞につき、時の助動詞の「たり」は動詞につくと知るべし。

○四　さるべき事ありて東國へ旅立ちなむとす

小倉山嶺のもみぢ葉心あらば今一度の御幸待たなむ

人麿なむ歌の聖なりける

右の「旅立ちなむ」の「なむ」は時の助動詞の「なむ」にして、「待たなむ」の「なむ」は希望の助詞の「なむ」、「人麿なむ」の「なむ」は係の助詞の「なむ」なり。但し、時の助動詞の「なむ」は動詞の連用形につき、希望の助詞の「なむ」は動詞の未然形につき、係の助詞の「なむ」は、下の結の連體形に應ずるものと知るべし。

○**五**　風收りて雨となりぬ

思ひのままにならぬはなし

右の「なりぬ」の「ぬ」は時の助動詞の「ぬ」にして、「ならぬ」の「ぬ」は、否定の助動詞「ず」の連體形なり。但し、時の助動詞の「ぬ」は動詞の連用形につき、否定の助動詞の「ぬ」は

動詞の未然形につくと知るべし。

○**六**　夢の間に過ぎにけり

及ばざるは過ぎたるにまさる

風は凪ぎたるに波は收らず

右の「過ぎにけり」の「に」は時の助動詞「ぬ」の連用形にして、「過ぎたるに」の「に」は位置を示す助詞の「に」、「凪ぎたるに」の「に」は接續の助詞の「に」なり。

○**七**　眠りし獅子に異ならず。

さる事なきにしもあらず

右の「眠りし」の「し」は時の助動詞「き」の連體形にして、「なきにしもあらず」の「し」は、意味を強むる助詞の「し」なり。

○八　風こそ烈しかりしか

路遠かりしかばいたく疲勞したりき

何年に亡せ給ひしか

右の「烈しかりしか」「遠かりしか」の「しか」は時の助動詞「き」の已然形にして、「給ひしか」の「しか」は時の助動詞「き」の連體形なる「し」に、疑問の助詞「か」が添はれるものなり。

○九　見もせねば聞きもせず

早く行きね

右の「見もせねば」の「ね」は否定の助動詞「ず」の已然形にして、「行きね」の「ね」は時の助動詞「ぬ」の命令形なり。

○十　かたへの人憎しと聞くらむ

心知れらむ人に見せばや

右の「聞くらむ」の「らむ」は推量の助動詞の「らむ」にして、「心知れらむ」の「らむ」は時の助動詞「り」の未然形に、又時の助動詞「む」の添はれるものなり。

○十一　心あらむ人に見せばや

心動くに涙落つるも露の身なればや

右の「見せばや」の「ばや」は希望の助詞の「ばや」にして、「身なればや」の「ばや」は接續の助詞「ば」に、疑問の助詞「や」の添はれるものなり。

○十二　今もなほ古の俤ありや

月明かに風清くげに心ゆく夜なりや

右の「係ありや」の「や」は疑問の助詞の「や」にして、「夜なりや」の「や」は感動の助詞の「や」なり。

○十三怠らず勉められよ

夢にも思はざりしよ‖

右の「勉められよ」の「よ」は命令の助詞の「よ」にして、「思はざりしよ」の「よ」は感動の助詞の「よ」なり。

○十四決して父母の教訓に反くな‖

いと尊き事なりな‖

雨霽れなば散歩せむ

右の「反くな」の「な」は命令の助詞の「な」にして、「事なりな」の「な」は感動の助詞の「な」なり。又、「霽れなば」の「な」は

接續の助詞の「とも」「ども」は略せられて「も」となること四九頁に說けり。

時の助動詞「ぬ」の未然形の「な」なり。

○十五彼にも相當の意見あるべし‖

大君はいとも畏し‖

口先は強きも內心は臆病なり

右の「彼にも」の「も」は彼に此を加ふる意の助詞の「も」にして、「いとも」の「も」は感動の助詞の「も」なり。又、「強きも」の「も」は「ども」の略せられたる接續の助詞の「も」なり。

○受身可能・崇敬の助動詞の「る」「らる」も互に惑ひ易きものなれど、これ等は已に前にその區別を說明したれば、こゝには略せり。

○以上の外に、猶その語形の類似せるものなきにはあらね

ど、少しくその意義に注意せば、おのづから惑ふことなかるべし。

◎左の文章中の施線の語の異同を辨ぜよ。

一　(イ)生き殘りしもの。
　　(ロ)生きとし生けるもの。

二　(イ)人の子たるもの。
　　(ロ)日の暮れたるころ。

三　(イ)先ごろより見知りぬ。
　　(ロ)嘗て見知らぬ人。

四　(イ)早く行きね。
　　(ロ)國の爲に死ね。

五　(イ)路のほど遠くもあるかな。
　　(ロ)花よりも木ぶりこそよけれ。

六　(イ)昨日こそ早苗とりしか。
　　(ロ)何事もなかりしか。

七　(イ)月も出でなむとす。
　　(ロ)思ふ方の風も吹かなむ。

八　(イ)古もかゝる事ありきや。
　　(ロ)面白き景色なりや。

九　(イ)謀も空しくなりき。
　　(ロ)洽く人の知る所なりき。

十　(イ)足に任せて行く。
　　(ロ)雪深く積りにけり。

十一　(イ)あるじなしとて春を忘るな。

（ロ）花の色はうつりにけりな。

十二　（イ）時鳥まだしきほどの聲を聞かばや。

（ロ）紅葉すればや照りまさるらむ。

第十一章　誤り易き語法

○我等は自然に我が國語に熟達し居るが故に、文章を草するに當りても、大方はその用法を誤ること少けれど、まゝ文語と口語との法則を混同せるより誤謬を生ずることあり。左にその普通に誤り易き語法を例示すべし。

○一　今年は花の綻ぶる事甚だ早し（正）

今年は花の綻ぶ事甚だ早し（誤）

子女に金錢を持たする事は宜しからず（正）

子女に金錢を持たす事は宜しからず（誤）

右は動詞を下の體言につゞくるにはその連體形よりすべきを、誤りてその終止形よりせる例なり。

○二　日日の出來事を錄せしむ（正）

日日の出來事を錄さしむ（誤）

かかる慶事を祝せずばあるべからず（正）

かかる慶事を祝さずばあるべからず（誤）

人の感情を害せざるやうにすべし（正）

人の感情を害さざるやうにすべし（誤）

我我は何人にも抗せじ（正）

我我は何人にも抗さじ(誤)

國法を犯すものは罪せむ(正)

國法を犯すものは罪さむ(誤)

右は動詞の未然形に「しむ」「ず」「ざり」「じ」「む」等の助動詞を添ふる場合に、誤りてその動詞を四段活用の如く活用せしめたる例なり。

○**三** この寺を建立せしは何年頃ならむか(正)

この寺を建立ししは何年頃ならむか(誤)

右は動詞の未然形に助動詞「き」の連體形「し」を添ふる場合に、誤りてその連用形に添へたる例なり。

○**四** 朝は必ず日出前に起くべし(正)

朝は必ず日出前に起きべし(誤)

無用の品とて妄に捨つべからず(正)

無用の品とて妄に捨つるべからず(誤)

悪人といへども子は捨つまじ(正)

悪人といへども子は捨てまじ(誤)

この恨は決して忘るまじ(正)

この恨は決して忘るるまじ(誤)

峰の老松幾代か經らむ(正)

峰の老松幾代か經るらむ(誤)

夜もはや明くらし(正)

夜もはや明くるらし(誤)

右は動詞の終止形に「べし」「まじ」「らむ」「らし」等の助動詞を添ふる場合に、誤りてその連用形、又は連體形に添へたる例なり。

◎五 我等は某先生の教育を受けたり(正)
我等は某先生の教育を受けけり(誤)

右は動詞の連用形に助動詞「たり」を添ふる場合に、誤りて「り」を添へたる例なり。但し、「り」は四段・佐變の兩活用の動詞に限りて添はるものと知るべし。

●六 戸外の様子を見させき(正)
戸外の様子を見さしき(誤)
未明に起させたり(正)

未明に起さしたり(誤)

右は動詞の連用形に「き」「たり」等の助動詞を添ふる場合に、誤りてその動詞を佐變の活用の如く活用せしめたる例なり。

○七 御來車下さるべく候ふ(正)
御來車下されべく候ふ(誤)
幼き者には習はしむべからず(正)
幼き者には習はしむるべからず(誤)
多くの人に見さすらし(正)
多くの人に見さするらし(誤)
やすやすとは欺かるまじ(正)

やすやすとは欺かれまじ（誤）

右は動詞の終止形に「べし」「らし」「まじ」等の助動詞を添ふる場合に、誤りてその連用形、又は連體形に添へたる例なり。

○八　決して油斷すな（正）

決して油斷するな（誤）

遊藝など習はしむな（正）

遊藝など習はしむるな（誤）

右は動詞の終止形に助詞「な」を添ふる場合に、誤りてその連體形に添へたる例なり。

○九　汝は論語を讀まるるか（正）

汝は論語を讀まるか（誤）

右は動詞の連體形に助詞「か」を添ふる場合に、誤りてその終止形に添へたる例なり。

◎十　明日餘暇あらば遠足せむ（正）

明日餘暇あれば遠足せむ（誤）

御都合よくば御立寄り下されたく候ふ（正）

御都合よければ御立寄り下されたく候ふ（誤）

右は助詞「ば」が上の動詞・形容詞の未然形を受けて未定の條件を表すべき場合を、誤りてその已然形を受けて確定の條件を表したる例なり。

○十一　いかに路は遠くとも厭はじ（正）

○十一　いかに路は遠しとも厭はじ(誤)
急ぎ行くべくとも暫く待たれよ(正)
急ぎ行くべしとも暫く待たれよ(誤)
右は形容詞、及び之と活用の似たる助動詞の連用形に助詞「とも」を添ふる場合に、誤りてその終止形に添へたる例なり。

○十二　某新聞は日曜日と大祭日とは休刊す(正)
某新聞は日曜日と大祭日との翌日は休刊す(正)
某新聞は日曜日と大祭日の翌日は休刊す(誤)
右は助詞「と」の用法を誤れる例なり。すべて誤解を生じ易き場合には、相重なれる體言の各個の下に「と」を添ふ

べきものと知るべし。

○十三　遠近の山山烟霞の中にぞほの見ゆる(正)
遠近の山山烟霞の中にぞほの見ゆ(誤)
かかる人なむ世にも珍しき(正)
かかる人なむ世にも珍し(誤)
正成こそ古今に稀なる忠臣ならめ(正)
正成こそ古今に稀なる忠臣ならむ(誤)
右は係結の法則を誤れる例なり。但し係結の法則につきては、上卷第二十二章を見るべし。

○十四　意外の事のみ出で來けり(正)
意外の事のみ出で來き(誤)

その價安きがごとかれど實際は高きなり(正)

その價安きがごとけれど實際は高きなり(誤)

右は「き」「ごとし」の用法を誤れる例なり。「き」は加變の活用の動詞の連用形には續かず、又、「ごとし」には「ごとけれ」といふ活用なしと知るべし。

○以上述べたるものゝ外、なほ古來の語法と今文の語法と異なるもの少からねど、今はいづれの語法を用ふるも誤といふにはあらねば、これ等は略せり。

◎左の文章中の助動詞・助詞が、その連續を誤れりや否やを檢せよ。

一　吾は終夜眠らずして考へり。

二　君は今年何歳にならるか。

三　人夫に荷物を運ばさせて峠を越えぬ。

四　輕々しく斷行するな。冷靜に考へて見べし。

五　宿痾癒えて、多年の憂苦消え失せり。

六　君は未だ動物園を見まじ。

七　山の彼方に月出づるらむ。

八　數年を經て歸り來き。

九　いかに訓誡するも、改悛せらるゝまじ。

十　たとひ殺さるとも、いかで寃罪に伏すべしや。

◎左の文章の誤謬を指摘せよ。

一　今にして改心せずば、後悔するとも及ばず。

二　質問に答ふこと能はぬほど、恥しきはなかるべき。

三　身は千里を隔てりとも、心はなどか通じざらむ。

四　私欲を制すことは難く、放逸に流ることは易し。

五　腐敗じしものを食へば、必ず胃を害するべし。

六　暇あれば勉强すべしといふは、暇あるも勉强せぬ人なり。

七　人にはいはね、吾が心は一日とて安きことはなけれ。

八　我が日本は神國なりとぞ、古よりいひ傳へき。

九　夜は明けたるがごとけれど、人の起き出でたる樣子もなし。

十　風さへ吹かねば花も散るまじを、昨夜の暴風ぞ怨めしけれ。

十一　貧家に生れたるこそ幸福なると、古聖もいはれたれ。

十一　露の命と思へども、なほ惜しまるが世の常なりけれ。

十三　弓を射らむとするものは姿勢を正しふし、只一本の矢をもあだにはせじと思ふべけれ。

十四　この品は、都におはししさる貴人より吾が父に賜ひしものなれ。

十五　老ひて後に悔ふるもかひなき事なれば、若き時に怠らずよく勉めべし。

十六　無用の事に拘りて貴重の月日を空費せまじきものなれ。

十七　容貌いかに美はしとも、心ざま正しからざれば、眞の人とはいはれまじ。

十八　花を咲かさしむるも雨、花を散らさしむるも亦雨ならずや。

十九　若し御意見も候へば、御腹藏なく御提議下されべく候。

二十　庭に植ゑる草木も、伸びるを抑へ倒れるを起しなどしてこそ、よき姿にもなるなりとぞ聞きしか。

文章篇

第一章　主語　述語

○種々の單語をつゞり合せて、完結せる思想を文字にて表せるものを文章といふ。

鳥　啼く

百花　咲き亂る

風　烈し

身體　か弱し

○右の「鳥」「百花」「風」「身體」などの如く、その文章の主體と

述語は、又說明語ともいふ。

なる語を主語といひ、「啼く」「咲き亂る」「烈し」「か弱し」などの如く、その主語の動作・有樣などを說述する語を述語といふ。

○主語は體言より成り、單獨に表るゝか、さらずば下に他語との關係を表す助詞の添はりて表るゝものなり。

○風　吹く

月　清し

猫が　眠る

朝は　寒し

○述語は用言より成り、更に助動詞・助詞等の添はりて、その意味を完全ならしむるものなり。

下の例の如き場合の「なり」「たり」「ごとし」等を述語とし、又「聖人」「船長」「山の」等を補語と見なす說もあり。補語のことは、本篇第二章にて說くべし。

夕風涼し
迅雷轟く
日も暮れたり
我は眠られず
過失無かりしか

○述語は、又、體言若しくは用言の下に「なり」「たり」「ごとし」等の助動詞の連りたる語より成ることあり。

孔子は聖人なり
月光の漏るるなり
父は船長たり
怒濤山のごとし

風景描くがごとし

○或用言の下に連ねて用ひらるゝ「もの」「こと」「ところ」等の體言が主語となり、又は下に「なり」「たり」等の連りて述語となりて表るゝことあり。

喜ぶものは稀なり
破ることと少からず
信ずるところ篤し
佞人は憎むべきものなり
兄弟爭は見苦しきことなり
富貴は希望するところたり

○右の如き場合の「もの」「こと」「ところ」等は、省略せらるゝ

文主は、又、總主語ともいふ。

こと多しと知るべし。

○以上述べたるが如く、主語は文章の主題にして、述語はその動作・有樣を述ぶるものにて、いづれも文章の主要語なれば、いかなる文章にても、必ず主語と述語とを要するものと知るべし。

○又、主語と述語とを具へたる文章が、更に或主題の述語として用ひらるゝこともあり。

象は　體—大なり
沖は　波—荒し
彼は　見聞—廣し

○右の「象」「沖」「彼」などの如きは、全文の主語とも見るべきものなれば、之を**文主**といふ。

第二章　客語　補語

○文章の述語が他動詞より成る時は、必ずその動作の目的となるべき語を要す。

犬が　猫を　追ふ
暴風　家屋を　吹き倒しぬ
汝は　彼等を　知れりや

○右の「猫を」「家屋を」「彼等を」などは、下の述語の目的語となるものにて、卽ちその動作を受くる客體なれば、これを**客語**といふ。

○文章の述語が自動詞より成る時は、客語は要せざれども、單に自動詞のみにては文意の通ぜざることあり。かゝる場合には、その意の足らざるを補足すべき語を要す。

面は　猿に　似たり

水が　氷と　なる

○右の「猿に」「氷と」などは、下の述語の意を完全ならしむるために要する語なれば、之を補語といふ。

○又、述語が形容詞よりなる時も、補語を要することあり。

猿は　人に　近し

Aは　Bと　同じ

○又、述語が他動詞よりなる時も、その語の性質によりて補語を要することあり。この場合には、客語と補語とを具ふるものなり。

父が　財産を（客語）　子に（補語）　讓る

賊が　岩穴を（客語）　住家と（補語）　爲す

○又、述語が受身・使役の相の動詞などより成る時も、補語を要するものなり。

賊は　警吏に　捕へらる

彼等は　商人と　思ひ違へらる

教師が　生徒に　音樂を　習はす

甲は　乙に　罪を　謝せしむ

○客語、若しくは補語を特に目立たしめむがために一文の

客語・補語の區別を設けず、いづれも主語に對して客體の語なれば、總稱して之を客語とする說もあり。

首位に掲げて、更にこれが代名詞をその位置におくことあり。

論語は（客語）　余は　これを（客語）　父に　學べり

太郎には（補語）　母　これに（補語）　繪を　習はしむ

○右の如き場合の「論語は」と「これを」とは同格の客語にして、「太郎には」と「これに」とは同格の補語なりと知るべし。

○以上例示せるが如く、客語と補語とは、主語と同じく體言より成り、而して大方客語には下に助詞「を」が添はり、補語には下に助詞「に」「と」などが添はるものなり。

○客語・補語も、亦、主語・述語などと同じく、闕くべからざる文章の主要語なりと知るべし。

第三章　修飾語

○主語・客語・補語・述語等は、種々の語によりてその意義を形容修飾せらる。

涼しき　風　吹く

外人　日本の　風土を　賞す

光陰は　流るる　水に　似たり

雨　烈しく　降りき

○右の「涼しき」「日本の」「流るる」「烈しく」などの如く、文章の主要語を形容修飾する語を修飾語といふ。

○主語・客語・補語として用ひらるゝ體言の修飾語は、形容詞、

若しくは之に準ずべき語より成り、又、述語として用ひらる丶用言の修飾語は、副詞、若しくは之に準ずべき語より成る。

流るる　水は　清し
吾が　弟は　美しき　油繪を　持てり
荒廢せる　城址は　狐狸の　住家と　なれり
風雨　ますます　烈し
彼は　終日　家に　在り
迅雷　殷殷として　轟きわたる
家庭に於ける　辛勞は　少しも　無し
不幸なる　彼は　病を以て　夭折せり

○右の「流るる」「美しき」「荒廢せる」などの如く、動詞・形容詞などの連體形が修飾語として用ひらる丶時は、更に主語・客語・補語の添はることあり。

月—清き　夜は　稀なり
鹿を—追ふ　獵師は　山を　見ず
虎に—似たる　動物は　猫なり

○修飾語として用ひらる丶動詞・形容詞などの連體形は、下の體言が省略せられたる場合には、直に主語・客語・補語と見なさる丶ものなり。(八一頁參照)

知る(人)は　稀なり
弟は　行く(こと)を　欲せず

老いたる(もの)は　若き(人)に　扶けらる

●修飾語は、又他の修飾語と相重なりて表るゝことあり。

清く-涼しき-風　かなたの-海上より-吹き来る

一　我が-伯父の-子供が　美しく-書ける-畫を　持てり

鬱鬱と茂れる-木影　青き-水の-面に　映れり

清き-涼しき-風　そよそよと海上より-吹き来る

二　我が-京都なる-友は　新しき-綺麗なる-杖を　持てり

岸頭の茂れる-木影　青き-池の-水に　映れり

○右の例一は修飾語が相連りて上の修飾語が下の修飾語

を修飾するものにして、二は修飾語が相並びて下の主語・客語・補語・述語等を修飾するものなり。かく修飾語が相連るか相並ぶかして、文章は次第に長くなり行くなり。

○佐變の動詞「す」が述語となれるときは、大方上に修飾語を添ふるを要す。

父子　身を　全う―す

彼は　我我を　蔑に―す

我は　責任を　明かに―せり

○右の「全うす」「蔑にす」「明かにせり」の如きは、一の熟語の動詞として、述語と見なすも妨なし。

◎左の文章中の主語・客語・補語・述語・修飾語を區別せよ。

一　仁者は山を樂しむ。
二　頼朝は弟の義經に平家を討伐せしむ。
三　田舍の人が人造金を眞の黃金と見誤る。
四　我は懇切なる叔父の保護を受く。
五　怪しき人影彼方の物陰に見えたり。
六　小さき赤き犬が大なる白き兎を捕へたり。
七　活潑なる精神は健康なる身體に宿る。
八　我が家は代々主君の殊遇を辱うせり。
九　彼の一生は頗る洒脱なる逸話に富めり。
十　古の武士は命を鴻毛よりも輕んじたり。

第四章　主部・客部・補部・述部・文主部

○文章の主語と之に屬する修飾語とを合せて**主部**と稱し、客語と之に屬する修飾語とを合せて**客部**と稱し、補語と之に屬する修飾語とを合せて**補部**と稱し、述語と之に屬する修飾語とを合せて**述部**と稱し、文主と之に屬する修飾語とを合せて**文主部**と稱す。

主部　庭前の遺水の邊の小萩が　咲き初めたり

客部　太郎が　水に溺れし人を　救助せり

補部　我は　やさしく懇なる一人の叔母に　育てらる

述部　蓮の花　いかにも清く美しく咲きたり

舶來の品は（文主部）　その價（主部）　和製のものよりも高し（述部）

黑き犬が（主部）　斃れし馬の肉を（客部）　頻に嚙み食ふ（述部）

○主語・客語・補語・述語は、いくつも重なりて一文章中に表ることあり。これ等も總括して一の主部・客部・補部・述部と見なすべし。

梅も櫻も桃も（主部）　一時に咲き出づ

太郎は　筆と紙と墨とを（客部）　買ひ求めたり

父が　太郎次郎三郎に（補部）　財產を分與せり

奢侈は　恐るべく戒むべし（述部）

我と彼とは（主部）　同時に出征し同時に凱旋せり（述部）

楠木正行は　忠臣にして且つ孝子なり（述部）

兄は　國語及び漢文をば（客部）　父と叔父とに（補部）　學べり

◎以上述べたる、主部・客部・補部・述部・文主部も、一の主語・客語・補語・述語・文主と見なして取扱はるべきものなり。

◎左の文章を主部・客部・補部・述部に分て。

一　人の少き家は、至つて寂しきものなり。

二　隣家の子供が、面白き畫を描きたる本を澤山に持てり。

三　正確なる知識は、銳利なる器械のごとし。

四　赤道直下の地は、春も夏も秋も冬も殆ど同じ氣候なり。

五　露國と支那とは日本とは、相隣する獨立國なり。

六　正成は智・仁・勇を兼備せる名將なりき。

七　我等が育てられたる伯父の家は彼方の森陰に見ゆ。

八　伯父は生臭き肉類と、焼きたる豆腐とを食はず。

第五章　主語・客語・補語・述語・修飾語の倒置及びその省略

○一の文章中にて、主語は上位にあり、述語は下位にあり、客語・補語はその中間にあり、而して修飾語はその修飾すべき語の上にあるべきが常なれど、これらのうちにて、特に主眼とする語を首位におきて注意を促さむために、その位置を顛倒せしむることあり。

東郷大將を　君は　知れりや

木の枝に　凧が　懸る

あはれなり　霞に消ゆる船の影

昨夜　吾等は　東京を　出發せり

○右の如く、主語は他語の倒置によりて、却てその下位に表るゝことあり、また修飾語は述語の修飾語に限り、その間に他語を隔てて表るゝこともありと知るべし。

●主語・客語・補語・述語等の文章の主要語も、その語を省きても文意の通ずる時は、之を省略することあり。

(誰も)この土手に登るべからず

高山には雪多く平地には(雪)少し

吾等は(其の事を)少しも知らざりき

人は(我を)識るとも我は(人を)恨みじ

弟も入學を(學校長に)許されたり

人人舟に乗りたれば我も(舟に)乗りぬ

彼は末恐るべき少年にこそ(ありけれ)

北部は麥を(産し)南部は茶を産す

梶原(佐々木)たばかられぬとや思ひけむ續いて馬を(宇治川に)打ち入れたり

○右は文章の主要語の省略せられたる例なれど、なほ主要語に添はれる助動詞・助詞などの省略せらるゝことも少からず。

父は煙草(を)も呑まず

人人夏(に)は麻衣を着る

勉強は幸福の母(なり)

彼は何人(なる)ぞ

(吾が)天の原(を)ふりさけ(て)見れば(かの月は)春日なる三笠の山に出でし月(なる)かも

露の(ごとき)命(が)惜しと(いふ)にはあらねど(吾は)ただ徒に(死せむ)やはと思ふにこそ(ありけれ)

○此の如く、文章の主要語、及び之に添はれる助動詞・助詞などの省略せらるゝは、その語を省きても文意の明かなる時、殊に文章を簡明ならしめむとして行はるゝものなり。

◎左の文章につきて、省略せられたる語を補ひ、倒置せられたる語を正位に復して見よ。

一 我を誰と思ふか。

二 これより内、猥に入るべからず。

三 多く財を有する人は少しく散じて貧民を救へ。

四 我聞く、臺灣は惡疫流行すと。

五 油斷大敵。

六 門前にて、われ等は待たむ。

七 煙草も酒も、子女は呑むべからず。

八 低きに居りて高きを望むは、世人の常か。

九 料らざりき今日反つて君の葬を送らむとは。

十 東路の人に問はばや、白川の關にもかくや花は匂ふと。

第六章 句

○前の第三章にも例示せるが如く、一の文章が他の修飾語となりて表るゝことあり。

○一 月清き夜は稀なり

子供が肩先の破れたる 着物を 着る

彼は意志堅固なる 人と 思はる

故郷の兩親も花咲かば 上京せむ

右の「月清き」「肩先の破れたる」「意志堅固なる」「花咲かば」

などの如く、一の文章がその獨立を失ひて修飾語として用ひられ、文章の一部分を成せるものを**句**といふ。

○**二**　人少き　家は寂し

子供等は　父の歸る　日を指折りて待つ

華やかなりし邊も　人住まぬ　野らと成る

右の「人少き」「父の歸る」「人住まぬ」などは、下の體言を修飾するものなれば、之を**形容詞句**といふ。

○**三**　勇士は　力盡くとも　屈せず

風吹けば　木の葉散る

彼は　徳高けれど　學識に乏し

右の「力盡くとも」「風吹けば」「徳高けれど」などは、下の用言を修飾するものなれば、之を**副詞句**といふ。

○**四**　親の子を愛するは　眞情なり

人人　彼が死せるを　悲しむ

點點たる　漁火は　星のきらめくに　似たり

右の「親の子を愛する」「彼が死せる」「星のきらめく」などは、下にあるべき體言に添はる形容詞句なれど、下の體言が省略せられて名詞と同一の用をなすものなれば、之を**名詞句**といふ。

○**五**　夏は暖く　冬は寒し

兄は音樂を好み　弟は繪畫を嗜めり

顔は青ざめ　手足は冷え　息も絶え絶えなり

右の「夏は暖く」「兄は音樂を好み」「顏は青ざめ」「手足は冷え」などは、下の文章と相重なりて表るゝまでにて、いづれも獨立したる意義を有するものなれば、これを獨立句といふ。

◎左の文章中の形容詞句・副詞句名詞句・獨立句を指摘せよ。

一　前車の覆るは後車の戒なり。

二　風薰る春の野を逍遙して歸る。

三　水清ければ、大魚棲まず。

四　光陰の速かなるは、水の流るゝに似たり。

五　風の吹かぬ日は、一日とてなし。

六　怠るものは必ず負け、勉むるものは必づ勝つ。

七　何人も敵する者なしとて、油斷すべからず。

八　髮は亂れ、衣は破れ顏色やつれたり。

九　風土砂を飛ばし、泥濘塗を沒す。

十　日は暮れたるに、宿るべき家なし。

十一　夥しく名士の集ひしが、一人も我が見知れるものは無かりき。

十二　春來れども、風寒くして花の咲く事遲し。

第七章　文章の構造上の種類

○文章をその構造の上より區別して、單文複文重文の三種とす。

一、單文

○一の主語と、一の述語とにて單一なる叙述をなす文章を**單文**といふ。

(主語)　(述語)

風　涼し

人が　走る

百花　爛漫たり

霖雨　霽れたり

○述語の性質によりて、客語・補語の添はれるものも、一の單文なり。

(主語)　(客語)　(述語)

子供が　畫を　習ふ

「兎は前足短し」「外海は波荒る」など文主を有する文にありては、「前足短し」「波荒る」等の文

暴風　家屋を　倒壊せり

(主語)　(補語)　(述語)

猿は　人に　近し

城址が　畠と　變りぬ

(主語)　(客語)　(補語)　(述語)

賊が　岩穴を　住家と　なす

父が　財産を　長子に　讓りたり

○又、主部・客部・補部・述部より成れるものも、主語と述語との關係は單一なれば、なほ單文なり。

烈しき風　堅牢なる家を　悉く倒壊せり

主部　客部　述部

吾が兄弟は　一人の叔母に　幼少より育てらる

主部　補部　述部

は、上の文主に對して述語の地位に立つものなれば、此等も亦單文とすべし。

我と彼とは（主部）　同時に出征し、同時に凱旋せり（述部）

兄は（主語）　國語及び漢文をば（客語）　父と伯父とに（補部）　學べり（述語）

獸を狩る獵師は（主部）　獸に等しき服裝を（述部）　なす（述語）

二、複文

○一の文章の中に形容詞句・副詞句・名詞句等の句の含まれたる文章を複文といふ。

雪降る夜は靜かなり

伯父が黑き門ある家を建てたり

將軍は年老いて元氣ますます盛んなり

風は烈しく吹けども雨は少しも降らず

途中にて吾等は三人の友の來るに會せり

人人暴風の兆ありとて戰き騒ぐ

月日の早く過ぎ行くはあだかも水の奔流するに似たり

○複文は、又、他の文章中に含まれて表るゝことあり。

臣君を諫むる事は國家のためなれば憚る所なし

所願成就して目的達したる時は筆舌に盡し難き愉快あり

彼は慈愛深き人なれば彼を慕はぬ者なし

○右の如く、複文が句となりて一文章の中に表るゝものも、また複文なり。

三、重文

○獨立句が下の文章と相重なりて、一の文章をなせるものを**重文**といふ。

髮は黑く肌は白く眼は涼し

豹は死して皮を留め人は死して名を留む

怠る者は必ず負くべく勉むる者は必ず勝つべし

○右の如く、重文中の獨立句は、その述語たる動詞・形容詞、及び之に添はる助動詞の連用形を以て、下につゞくるものなり。

○若し又、重文中の獨立句の述語が形容動詞なる時は、「あり」に連らぬ原の形に表るゝものなり。

月明かに星稀なり

風穩かに波立たず

才學拔群にして名聲天下に轟く

迅雷轟轟としてその響六合に震ふ

○又、重文にては、最末の述語の時が上の各獨立句の時を代表するものなり。

雨烈しく降り（現在 降る）風いよいよ吹く

父は三年前に死に（過去 死にけり）母は去年の秋亡せけり

明日は算術を復習し（未來 復習せむ）明後日は理科を復習せむ

○以上、單文・複文・重文の大要を述べたれども、なほ複文が重文中に含まるゝものあり。又、重文が複文中に含まるゝものあり。

花咲く春は樂しく月澄む秋は哀なり

風の吹かぬ日は暖く雨の降る日は涼しかりき

日出づれば空晴れ日沒すれば空曇る

○右の如く複文が重なりて重文を形成するものも、また重文なり。

花咲き鳥啼く春は來りぬ

紙は色白く質強く光澤あるをよしとす

日暮れ風加はれども暑氣更に減ぜず

○右の如く、重文が句となりて複文を形成するものも、また複文なり。

○吾等が日常讀みもし、書きもする所の文章は、かくの如くにして單文・複文・重文相混淆して複雜なる文章をなすものなり。

◎左の文章は單文複文重文のいづれに屬するか。

一　能ある鷹は爪をかくす。

二　人の一生は重荷を負うて遠き路を行くが如し。

三　吾が軍の向ふ所、草木も悉く風靡す。

四　大厦高樓の櫛比せしあたりも、今は荒涼たる一僻邑となれり。

五　雨風烈しく、道は暗くして、吾等は進退に窮せり。

六　水は方圓の器に從ひ、人は善惡の友による。

七　私欲を制するは難く、放逸に流るゝは易し。

八　身は千里を隔てたりとも、心はなどか通ぜざらんや。

九　問ふは一時の恥にして、知らぬは末代までの恥なり。

十　我は餓死すとも、人に食を乞ふこと能はず。

十一　泰山は土壤を讓らず、河海は細流を擇ばず。

十二　功成り名遂げて、身退く。

第八章　文章の性質上の種類

○文章をその性質の上より區別して、平叙體・疑問體・命令體・感動體の四種とす。

○事實をありのまゝに叙述する文章を平叙體の文といふ。

一、平叙體

梅の花咲き出づ

霜は軍營に滿ちて秋氣淸し

日本は東洋第一の强國なり

爲す事もなく徒に月日を過しけり

○右の如く、平叙體の文はその述語を動詞・形容詞・助動詞の終止形にて結ぶものなり。されど、上に「ぞ」「なむ」の係ある時は連體形にて結び、「こそ」の係ある時は已然形にて結ぶものなり。

松の木の間に人影ぞ見ゆる

久しく京になむ住みける

目には見えねど香こそ著るけれ

○然れども、「ぞ」「なむ」「こそ」の係が、一文章に含まるゝ句中にある時には、その結を轉じて、直に下につゞくるものもなり。

雪かとぞよそには見れど梅の花折りては似たる色なかりけり

年比よく具しつる人々なむ別れ難くおもひて頻にとかくしつつののしる

合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに道にもあらぬ御計ひいかがあるべき

○又、「と」「とて」「など」等の助詞にて受けたる挿入文も、一の文章中の句となれども、もと挿入文は獨立せる文章なれば、その係結を正しくすべきものと知るべし。

「物のあはれは秋こそまされ」と古人もいへり

「花ぞ昔の香に匂ひける」などいふ歌あり

二、疑問體

○敍述に疑ふ意を表す文章を疑問體の文といふ。

君は兄弟ありや

叔母の病氣は餘程重きか

甲乙いづれをよしと定むべきか

○右の如く、疑問體の文は敍述體の文の下に疑問の意を表

す助詞「や」又は「か」を添へて結ぶものなり。

●「や」は動詞・形容詞、及び、これに添はれる助動詞の終止形につき、「か」はその連體形につき、而して上に疑問の語ある時は必ず下に「か」を用ふべきが古來の語法なれど、今文にては、上に疑問の語の有ると無きとに拘らず、「や」も「か」も、共に連體形に添へて用ひらるゝに至れり。(四〇頁參照)

○上に疑問の語ある時は疑問の意明かなるを以て下に添ふべき「か」を省略することあり。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ(か)

夏草はしげりにけれど時鳥など吾が宿に一聲もせぬ(か)

○右の如く、下に添はるべき「か」の省かれたる場合に、助詞「ぞ」を添ふることあり。

汝の名は何といふ(か)ぞ

生れたる地はいづこなる(か)ぞ

○又、「や」「か」が文章中にありて係となる時は、「ぞ」「なむ」の係と同じき用法にて、卽ちその文章の終にある動詞・形容詞・助動詞の連體形にて結ぶものなり。

默默として何事をか考ふる

釋迦と孔子といづれか尊き

今は狐狸などの住家とやなりぬる

○疑問體の文は、又、疑ふ意の變じて確むる意となることあり。之を反語といふ。

我いかでか人に劣らむ(劣リハセジ)

月日は人を待つものかは(待ツモノニアラズ)

豈に徒に一生を終へむや(終ヘハセジ)

三、命令體

○叙述に命令の意を表す文章を命令體の文といふ。

汝は急ぎて行け

とくとく行きね

汝の繪草紙を彼に與へよ

彼にも其を見せられよ

油斷して負くることなかれ

ゆめゆめ父母の恩を忘るな

兜の天邊を射さすな

○右の如く、命令體の文の中、せよと命ずるものは、動詞、及び之に添はれる助動詞の命令形、若しくは、之に助詞「よ」を添へたる述語にて結び、すなと命ずるものは、「なかれ」といふ形容動詞の命令形、または、動詞、及び之に添はれる助動詞の終止形に「な」を添へたる述語にて結ぶものなり。

但し、その命令形に「よ」を添ふべきものは、上二段・下二段・上一段・下一段・加變・佐變の活用の動詞に限ると知るべし。

○又、今文には用ひられねど、古くは、「な」を動詞の上におき、（三七頁參照）その動詞を連用形に活用せしめて、下に「そ」といふ助詞を添へて、すなと命ずる意を表したり。但し、加變・佐變の動詞に限りては、その未然形に「そ」を添ふ。

幼きものとてな侮りそ

都人さこそ待つとも時鳥同じみ山の友な忘れそ

かへりな來そ

さるわざをなせそ

○又、動詞、及び之に添はれる助動詞の終止形に、推量の助動詞「べし」を添へたる述語にて結び、命令の意を表すこと

あり。但し、すなと命ずる時は「べからず」といふ。（三八頁參照）

汝は毎日英語を復習すべし

道路の左側を通行せらるべし

この花折るべからず

遲滯せしむべからず

四、感動體

○叙述に感動の意を表す文章を感動體の文といふ。

御父君もいと衰へたまひたるよな

脆きは人の心なるかな

花の色はうつりにけりな

そはいと忝しや

夜はいたく更けぬるよ

○右の如く、感動體の文は、多くその述語に感動の意を表す助詞を添へて表すものなり。

○感動體の文は、又、感動詞を伴ふこと多し。

聖人の徳あはれ大なるかな

ああ今年も徒に過ぎにけりな

○感動詞は文章外に獨立する語なれど、かくの如き場合には、ひきくるめて一の感動體の文と見なすべし。

◎左の文章は、平叙體疑問體命令體感動體のいづれに屬するか。

一 己の欲せざる所は、人に施すことなかれ。

二 人も學びて後にこそ、眞の徳はあらはるれ。

三 七たび尋ねて人を疑へ。

四 願はくは花の下にて死なむかな。

五 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

六 いづれの日か、この苦痛を免るべき。

七 人の上に立つ者は、決して輕々しき振舞を爲すべからず。

八 あはれ、今年も暮れにけるかな。

九 火を睹るより明かなる理ならずや。

十 無益の殺生は愼むべきことにこそ。

十一 山寺の鐘遠く聞えて、秋の日は已に山の端に入りぬ。

十二 この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからむ。

改修 新編日本文典 巻下終

大正十四年九月十三日改修印刷
大正十四年九月十六日改修發行
大正十四年十一月十日改修再版印刷
大正十四年十一月十三日改修再版發行

改修新編日本文典(全二冊)

定價	巻上	金参拾錢
	巻下	金参拾参錢
大正十五年度臨時定價	巻上	金五拾壹錢
	巻下	金五拾六錢

不許複製

編纂者 明治書院編輯部

東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者 株式會社 明治書院
取締役社長 鈴木友三郎

東京市京橋區本挽町二丁目十三番地
印刷者 新井修平

發行所 東京市神田區錦町一丁目
振替貯金口座東京四九九一番
株式會社 明治書院
電話大手五八四五、六八六九

電新堂印刷

第三學年
村重

廣末健一

広島大学図書
2000065663

文庫
25
663